

論文の要旨

論文題目	台湾人日本語学習者による日本語のアスペクト形式「テイル」の習得について
氏名	陳 建璋
学位	博士（文学）
授与年月日	平成28年5月31日

本論文は、日本語学習者のアスペクト形式「テイル」の習得について論じたものである。「テイル」は日本語教育において初級段階で導入される学習項目であるが、初級段階の日本語学習者のみならず、中・上級段階の学習者にも誤用が多く見られる。例えば、(1)は旧日本語能力試験1級合格者の書いた作文である。この中で、「テイル」の誤用は①～④の4箇所見られた。

- (1) 国内の教育制度によって、小・中学校の義務教育の9年に加えて、義務教育ではないが、進学率がほぼ90%以上の高校・大学の7年、および16年間かそれ以上の長い期間に教育を①受けていた(→受ける)ことが常態になってきたようです。ですが、学校にいた時間より、私たちは学校を離れている時間はずっと長いと思います。学校にいたときは、主に②利用している(→利用していた)のがもちろん学校の図書館です。(中略)以前、公立図書館についての記事を読んだことがあります。管理をよくしていないようで、きたないし、うるさいと③書かれました(→書かれていました)。私が図書館に④持っている(→持っていた)印象は壊されました。(SCU-A-3-475-1-T5)

このうち、①は「テイル」を使用すべきではないところに使用した過剰使用の例、③は「テイル」を使用すべきところに使っていない非使用の例、②と④は「テイタ形」を使用すべきところに「テイル形」を使用したテンスの誤りの例である。このように、上級段階の学習者の「テイル」の使用でも、上記のような過剰使用、非使用、テンスの誤りなどの誤用が見られることから、日本語学習者にとって「テイル」を正確に使いこなすのは必ずしも容易ではない。

これまでの「テイル」の習得研究には、大別して動詞の語彙的アスペクトの観点から考察したものと、「テイル」の様々な用法の習得難易度の観点から考察したものと2つがある。このうち、前者は「アスペクト仮説」の普遍性を検証するため、動詞を「限界性(telicity)」があるかどうか、或は「瞬間性(punctuality)」があるかどうかといった動詞(句)に内在する語彙的アスペクトによって「活動動詞」(例えば、「走る」「歩く」)、「達成動詞」(例えば、「作る」「壊す」)、「到達動詞」(例えば、「落ちる」「死ぬ」)、「状態動詞」(例え

ば、「ある」「いる」などといった動詞タイプに分類し、「テイル」はどの動詞タイプと結び付きやすいかについて考察している。一方、後者は「テイル」の表す意味を「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「繰り返し」、「単なる状態」などの用法に分類し、各用法の習得難易度について考察している。しかし、これまでの「テイル」の習得に関する研究には下記の5つの問題点が残っている。

1. 「アスペクト仮説」の検証と「テイル」の用法の習得難易度のいずれかの側面からのみ分析が行われており、両者間の関連について論じられていない。
2. 異なるレベルの学習者の「テイル」の習得状況を考察したものはまだ少ないため、日本語レベルの違いによって「テイル」の習得状況にいかなる変化があるのかについての検討はまだ不十分である。
3. これまでの「テイル」の習得研究では、主に文末の習得状況に焦点が置かれているため、文末と連体修飾節の構文的位置の違いが「テイル」の習得にどのように影響しているかについてはあまり論じられていない。
4. これまでの「テイル」の習得研究では、主に現在時制「テイル形」の習得を中心に行われており、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いについて殆んど論じられていない。
5. 「テイル」の習得に関わる複数の要因による影響の度合いと、それらの相互作用についての考察が欠如している。

そこで、以上の問題点を踏まえ、本論文では台湾人日本語学習者を対象に、「テイル」の習得に影響する要因を検証することとした。「テイル」の習得に関わる要因として、①「テイルの用法」（動作の持続、結果の状態、パーフェクト、繰り返し、単なる状態）、②「動詞タイプ」（活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞）、③「時制形式」（テイル形とテイタ形）、④「構文的位置」（文末と連体修飾節）の4つの要因を取り上げ、「テイル」の習得に関わる要因の強さを分析した。また、学習者の「テイル」の習得状況がどのように変化していくのかを考察するため、⑤学習者の「日本語学習期間」（1年、1年半、2年、2年半）を5つ目の要因として設定した。このようにして、「テイル」の習得過程で上記5つの要因がどのように絡み合って相互に影響しているのかを明らかにした。

本論文は序論から結論までを含め、全部で9章から成り立っている。

第1章では、序論として本論文の研究目的は、「テイル」の習得について上記5つの要因の関連を見ることにあることを論じた。

第2章では、「テイル」に関する先行研究を概観し、先行研究から浮き彫りになった問題点を取り上げ、本研究の研究課題として以下の5点を提示した。

研究課題 1: 「テイル」の各用法内における動詞タイプ別の使用率について日本語母語話者と日本語学習者の異同点を明らかにする。

研究課題 2: 「テイル」の習得における 5 つの要因（「テイル」の用法、動詞タイプ、時制形式、構文的位置、日本語学習期間）の影響の強さを明らかにする。

研究課題 3: 「日本語学習期間」の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

研究課題 4: 「構文的位置」（文末と連体修飾節）の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

研究課題 5: 「時制形式」（テイル形とテイタ形）の違いによって、「テイル」の習得がどう違うのかを明らかにする。

第 3 章では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」の「少納言」を利用し、日本語母語話者の「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用率について、構文的位置や時制形式の違いを考察した。その結果、日本語母語話者の「テイル」の全体的な使用について、5 つの用法のうち「結果の状態」(39.9%) の使用率が最も高く、次いで「動作の持続」(28.2%)、次に「パーフェクト」(13.5%) 或いは「単なる状態」(12.5%) となり、「繰り返し」(6.8%) の使用率が最も低いことがわかった。一方、動詞タイプ別の「テイル」の使用率を見ると、「到達動詞」(36.3%) の使用率が最も高く、次いで「活動動詞」(31.4%)、次に「達成動詞」(22.2%) となり、「状態動詞」(10.1%) の使用率が最も低いことがわかった。さらに、これらの順序は構文的位置と時制形式の違いでもあまり変わらないことがわかった。

第 4 章では、台湾人日本語学習者の「テイル」の習得に関する調査の概要について説明した。本論文では、「台湾人日本語学習者コーパス (CTLJ)」に収録された作文データを利用し、CTLJ において 2 年間で 4 回分（半年ごとに 1 回）の作文が揃っている 40 名の学習者による計 160 篇の作文データを調査対象とした。この章では、CTLJ から「テイル」の「正用」、「非使用」、「過剰使用」、「テンスの誤り」を抽出する方法について論じた。

続く第 5 章から第 8 章までは学習者の「テイル」の習得状況に関する調査の内容と結果を論じた。

第 5 章では、学習者の「テイル」の習得過程において、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の 5 つの要因が「テイル」の習得に如何なる影響を与えるのかについて検証するため、これら 5 つの要因で学習者の「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、学習者の「テイル」の習得に最も強く影響する要因は「テイルの用法」であり、次いで「動詞タイプ」と「時制形式」の 2 つの要因が同程度で続き、次に「構文的位置」、次に「日本語学習期間」の順となることを明らかにした。

また、第 5 章で取り上げた各要因の影響をより詳細に分析するために、第 6 章では「日

本語学習期間」を、第7章では「構文的位置」を、第8章では「時制形式」を中心に学習者の「テイル」の習得状況を考察した。

第6章では、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の正用率、およびそれが学習者の日本語学習期間によってどう違うのかを検証するために、①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「日本語学習期間」の3つの要因で「テイル」の正誤用の頻度を予測する分類木分析を行った。その結果、学習者の「テイル」の習得は「二回目」の調査時点（学習期間1年半）で止まっており、たとえ学習者の学年が上がっても「テイル」の習得はそれ以上進まないことが明らかになった。また、4つの調査時点のうち、「一回目」の調査時点を除く他の3つの調査時点では、「テイルの用法」の違いによる影響が見られた。この場合には、5つの用法のうち最も習得されやすいのは「動作の持続」と「単なる状態」の2用法であり、続いて「結果の状態」と「繰り返し」の2用法であり、最も習得されにくいのは「パーフェクト」の用法である、という習得難易度が明らかになった。さらに、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法では「動詞タイプ」の影響が見られた。4つの動詞タイプのうち「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」の3つの動詞タイプ（正用率87.3%）は「状態動詞」（正用率70.3%）より正用率が有意に高いことから、「動作の持続」と「単なる状態」の2用法において「状態動詞」と「テイル」との結びつきは、学習者にとって他の動詞タイプより習得されにくいものであることがわかった。

第7章では、文末と連体修飾節の構文的位置の違いによる「テイル」の習得状況について考察した。その結果、学習者にとっては文末（正用率72.3%）よりも連体修飾節（正用率81.0%）における「テイル」のほうが習得しやすいことが判明した。さらに、文末と連体修飾節における「テイル」の各用法に使用された動詞タイプ別正用率の分析結果では、文末において、「動作の持続」、「繰り返し」、「単なる状態」の3つの用法では、動詞タイプの違いによって正用率に明確な差が現れ、「活動動詞」と「到達動詞」の2つ（正用率87.2%）は「達成動詞」と「状態動詞」の2つ（正用率72.1%）よりも正用率が高かった。一方、連体修飾節では「テイルの用法」と「動詞タイプ」による正用率の違いはあまり見られなかった。このように、文末と連体修飾節の違いによって、「テイル」の各用法における動詞タイプ別の使用状況が異なることが明らかになった。

第8章では、「テイル形」と「テイタ形」の時制形式の違いによる「テイル」の習得状況について考察した。その結果、「テイル形」の正用率（78.7%）は「テイタ形」の正用率（65.5%）より有意に高いことから、学習者にとって「テイタ形」の習得は「テイル形」の習得よりも困難であることがわかった。さらに、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因による「テイル形」と「テイタ形」の正用率への影響を分析した結果、「テイル形」の習得では「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの要因の影響とも見られた。このうち、学習者の「テイル形」の使用に最も強く影響していた要因は「動詞タイプ」の違いであった。4つの動詞タイプのうち、「活動動詞」と「到達動詞」の2つ（正用率82.7%）は「達成動詞」と「状態動詞」の2つ（正用率67.6%）よりも正用率が高かった。また、「活動動詞」と「到

「到達動詞」の使用では、加えて「テイルの用法」の影響が見られ、5つの用法のうち「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法の正用率(89.0%)が最も高く、次いで「結果の状態」と「繰り返し」の2つの用法(正用率78.5%)、最後に「パーフェクト」の用法(正用率40.0%)となった。このように、同じ「活動動詞」と「到達動詞」でも「テイル」との結び付きにより表される意味の違いで、学習者の「テイル形」の習得状況に影響していることが明らかになった。一方、「テイタ形」の習得では「テイルの用法」の違いによる影響しか見られなかった。5つの用法のうち、「動作の持続」と「単なる状態」の2つの用法は「結果の状態」、「繰り返し」、「パーフェクト」の3つの用法よりも正用率が高い、という「テイル形」の場合とは異なる結果が観察された。

第9章の結論では、第2章で取り上げられた研究課題に沿って、各章の調査結果で明らかになったことをまとめ、残された課題を示した。

以上、本論文では「テイル」の習得過程における①「テイルの用法」、②「動詞タイプ」、③「時制形式」、④「構文的位置」、⑤「日本語学習期間」の5つの要因の影響、および各要因間の相互作用を明らかにした。本論文では「テイル」の習得について、「テイルの用法」と「動詞タイプ」の2つの側面から考察することにより、具体的にどの用法でのどの動詞タイプがどのように「テイル」の習得に影響しているかが指摘できた。さらに、「日本語学習期間」、「構文的位置」、「時制形式」による「テイル」の習得状況の差異を考察することにより、学習者が実際にどのような過程を経て「テイル」を習得していくのか、およびどのような点に習得上の困難点が生じるかを明らかにした。